

## 「マングース撲滅計画」で思うこと

森林生物部長 池田俊彌

最近、“沖縄県北部の森林地帯や南西諸島では、ハブを退治するために導入したマングースが繁殖したために多くの固有動物種が生存の危機に瀕しており、これらを守るためのマングース撲滅計画を実施する”旨の報道がなされた。このとき思い起こしたのは、かなり前の話だが、ニュージーランドのある無人島で固有種の保全のために外来のネズミ絶滅計画が実行され、その成功話が2年間の研究チームの活躍を描いたビデオで放映されたときに得た感動であった。それは、研究チームがそれまでに蓄積されていた生態や個体群動態の研究成果をフルに活用し、また新たな事象への対応策を即座に作り上げ、検証することによって解決に向かう姿が生き生きと映し出されていたからである。



「生物多様性の保全」は持続可能な森林管理の重要な指標であり、森林総研の生物分野においても「病虫害防除」とともに重要研究領域として位置付け、研究を推進している。日々の地道な研究は、単に学会報告等で完結はしない。研究の成果は前述の例のような事業・実践に適用されて始めて開花する、英語でいうOutcomesということだが、他者が活用してくれることを期待するという姿勢は消極的であり、それだけではパッション（情熱）のある研究者としては大いに不満足であろう。今後は森林総研自らが課題を提案し、実践・完結のシナリオを提示して行政、地域、民間等の協力を得る、あるいは行政等に施策を提言し森林総研の積極的関与を提示する努力が必要である。課題の大きさは問わない。要は実証することが大事なのである。実証研究に携わることによって研究意欲が増幅され、応用研究だけではなくて基盤研究の意義が強く確認されるのではないだろうか。

それでは森林生物分野が大きく関連する実証課題はどのようなものであろうか。一部実施あるいは計画中的のものも含め思いつきの例を挙げると、1) 小笠原諸島固有種・絶滅危惧種（アカガシラカラスバト、メグロ、各種マイマイ等が含まれる）回復計画、2) 大台ヶ原森林生態系修復計画、3) 南西諸島森林生態系修復計画（アマミノクロウサギ、ルリカケス等が含まれる）、4) 中国地方・紀伊半島ツキノワグマ遺伝的多様性維持計画、5) キイロコキウムシーボーベリア菌利用による松枯れ被害軽減計画、6) サビマダラオオホソカタムシ大量放出による松枯れ被害軽減計画、等々である。特定種の生態・動態の解明研究や、特定昆虫・微生物群の分類・多様性といった基礎・基盤研究もこれらの課題に組み入れることができるであろうし、また必要な場合が多々あるであろう。支所においては2) のような地域完結型の総合実証プロジェクトとともに、例えば6) のような課題を実施する最適な場として実証プロジェクトを主催する必要がある。この場合、当然のことではあるが他の支所や本所との連携（例えば大量増殖は本所担当）が重要になるであろう。これら実証計画の多くは、森林総研という単独組織だけでは実行困難な場合が多く、特に行政との連携が必要であるのは論を持たない。

来年の独立法人化を控え、「特定独立行政法人・森林総合研究所」は「中期目標」達成の重要な行動オプションとしてこのような実証研究を設定し、それを実行できるような基盤研究及び技術開発研究の方向をしっかりと構築する必要があるのではなかろうか。